
宗教と感染症

『現代宗教 2021』編集委員会

新型コロナウイルス感染症 COVID-19による災厄は、2019年の終わりに中国の武漢から始まり、またたく間に全世界に及んだ。世界各地で多くのいのちが失われ、大規模な経済的な打撃も進行している。COVID-19は人類社会にはかりしれぬ大きな痛みと苦難、怖れと不安、そして嘆きと悲しみをもたらしている。世界史的な激動が進行中で、この事態をどう受けて止めればよいのか、闇夜に手探りでそのすべを求めているような状況が続いている。

「宗教と感染症」というこの特集テーマは、コロナウイルス禍に見舞われているグローバル社会の、日本社会の、また私たちそれぞれの現状を捉え返す視点を得ることを目指したものである。まずは、現代社会における宗教のあり方に対する影響も問われる。感染の拡大の過程で、宗教界は活動のあり方に大きな変容を余儀なくされた。宗教集団が感染拡大の一因として注目されもした。儀礼等において集いをもつことは、宗教の根本に関わるものだろう。だが、それが困難になった。

多くの人々が急速に病状悪化しいのちを失っていく。家族でさえ立ち会うことができないこともある。遺体に触れることを避けなくてはならず、葬儀すら形ばかりのものしか行えなくなる。他方、この災厄をさまざまな宗教集団や宗教者がどう受け止めるかも問われる。なぜ、このような災厄が罪もない多くの人々、とりわけ弱い立場の人たちを襲うのか。科学的な説明を超えて、何か人間がさとるべき意味がそこにあるの

ではないか。そして、こういった問いかけは地震や津波、原発災害、水害などの場合とどう異なるのだろうか。

歴史的に見ると、そもそも感染症・疫病と宗教の間には深い関わりがあったのではないか。「隔離」の必要性が強くと説かれ、握手や対面などの接触さえ避けなくてはならない事態は予想もしなかった。しかし、かつて人類がそのような恐れを強くもち、それが穢れや忌みやタブーといったものと関わったのも事実だろう。時代の転換点で感染症・疫病が宗教史に及ぼした影響も見直す必要があるだろう。19世紀後半から20世紀中葉にかけて人類は感染症を制圧したが、この医学医療の勝利が人間の自力信仰と世俗化に与えた影響は大きい。そうだとすると、この新たな感染症に向き合うことは人類の宗教心や死の意識に新たな何かをもたらすだろうか。

現代世界にとって、新型コロナウイルス感染症がもたらすさまざまな影響と宗教の関わりを問うことも重要な課題だろう。グローバル化の進行と現代宗教の変容には大きな関わりがあるが、新型コロナウイルス感染症はグローバル化にある種の抑制をもたらすのだろうか。それは国境による隔たりや宗教による隔たりを強めるものになるのだろうか。それとも人類すべてがウイルスと闘うことによって、新たな連帯や協同の可能性が広がるのだろうか。それは平和や人間の安全保障、気候危機や環境問題などに対する、宗教の関わりを更新することになるのだろうか。宗教が人類社会に新たな希望の光をもたらす可能性はあるのだろうか。

新型コロナウイルス感染症 COVID-19が人類社会にもたらした衝撃を、宗教という観点から見直すことの意義について、いくつかの視点をあげてきた。もちろんこれだけに限るというわけではない。この特集を通して、「宗教と感染症」の双方についての理解が深まることを望んでいる。それはこのコロナウイルス禍に苦しむ人々、痛む人々への思いを深め、人々ともに私たち自身が困難に耐え、立ち向かう力を得ていくことにもつながるかもしれない。

(文責：島蘭 進)